海藻養殖に産業の芽

シンポで紹介 アカモクや深層水活用

海の森づくり推進協会（松田惠明代表理事）は2日、「新しい海藻産業の展望」をテーマに、アカモクやアワビなどの増養殖、海洋深層水の活用と利用を中心に、東京都内でシンポジウムを開いた。4人が登壇、増養殖の技術開発や食品利用の実例を紹介した。松田代表は100人の聴講者に向け、「今日集まったのは日本全国で海の森づくりをしていこうという人たち。意見交換、議論をしてほしい」とあいさつ。業界の最新情報を紹介した。

京都府がアカモク技術開発

ミネラルが豊富な健康食、肥料として注目されるアカモクについては、産学官の専門家ら4人が養殖技術、成分、商品化などについて講演した。

京都府農林水産技術センター海洋センターの瀬田智文技師は、京都府が取り組むアカモクの種苗生産と養殖技術について講演した。同府は種苗育成法と培養法で特許を取得。安定的な資源供給や労力削減などを可能にしている。

同府のアカモク一大漁場は宮津市養老地区。2007年度から漁獲を開始。天然アカモクの年変動は大きく生産が不安定になるため、養殖技術の研究に取り組んできた。

2月に種を取り、7月まで冷やして寝かせる。その後、幼胚を小片基質にまいて8月中旬まで培養、1㌢ほどの幼胚を水槽に移して1カ月で手のひら大に育てる。特許は、小片基質で育てる方法と、水槽で「立体攪拌（かくはん）培養」する方法の2種類。小片基質ごと海に出すため、安定した生産ができる。同培養法では、水槽の底面から空気を出して種苗をかき混ぜる。

瀬田技師は「空間を立体的に使うので場所をとらず、光を均一に当てられる」と説明。大きさの調整や労力削減につなげた。10月以降は種を漁業者に渡し、海中の中層延縄式養殖施設で育てる。

昨年度は3人の漁業者が3㌧生産。3年後には40～50㌧の生産目標を掲げる。「小片種苗2万個と水槽6～7基あれば可能。19年の漁業権更新時期に藻類養殖で区画を取って、行おうという動きもある。漁業者にアカモクが売れるという認識があり、目標達成になるだろう」と話した。

シンポジウムではこの他、海藻研究所の新井章吾所長が基調講演としてアカモクの肥料活用の効果や磯焼けした海底での成長可能性を示した。合同会社風の島フーズの松村和哉代表は伊勢アカモクを使用した同社製品とレシピを紹介。東京農業大の谷口亜樹子教授は神奈川県鎌倉産アカモクを使い地元企業と共同研究・開発した「アカモクのさつま揚」の他、「海藻と小麦粉を合わせると多糖類が多くて食感が良くなる」など食品への利用提案をした。

聴講者に語る松田代表

海洋深層水を陸上養殖に利用

水深200㍍より下層の海洋深層水を利用した海藻や貝類の養殖について、産学4人が国内外の事例、技術面などを講演した。髙橋正征・日本水産資源保護協会会長は海洋深層水の特徴などを解説。海洋深層水の学術的視点と陸上養殖への利用をテーマに紹介した。

シーベジタブル（高知県室戸市）の蜂谷潤代表は室戸岬で行う海洋深層水を使ったスジアオノリなどの陸上養殖事業を紹介。1日に1500㌧の海洋深層水を利用し、年間3万㌧のスジアオノリを収穫する。「海面養殖と比べ設備費が高いが、食害や気候の影響がなく、安定水温、栄養性に富む」と利点を説明。海藻類の種苗を他地域に販売する計画もあり、「これから日本各地に広げていきたい」（蜂谷代表）。海洋深層水と似た性質を持つ地下海水を使った養殖であれば、「全国の海岸で陸上養殖が可能」（同）。

高知大の大野正夫名誉教授は2008年からハワイで民間企業が行うオゴノリやエゾアワビの陸上養殖を紹介。海洋深層水を使い、「日本で獲れるエゾアワビよりも肉厚で弾力がある」（大野教授）という。ナノクス（福岡県北九州市）の米澤裕二常務取締役は、海水中1㍉㍑当たり3億個を超える酸素ナノバブルを使った技術のアワビ養殖への活用などを紹介した。

 無断の転載、複写、配布を禁じます。